

古代ギリシアの私役奴隷

—アリストパネエスの奴隷たち—

河 底 尚 吾

アリストパネエスが演劇界で活躍していた紀元前5世紀のアテナイでは、数多くの奴隷たちが自由市民の各家庭で、さまざまな用途に使用されていた。この事実は、アリストパネエスの作品に登場する奴隷たちの姿に接することによって、充分うかがうことができる。彼らのうち、国家の費用によって公共のために服務していた者を公役奴隷とよび、個人の費用によって個人の家庭で使用されていた者を私役奴隷とよぶが¹⁾、本論では私役奴隷についてのべることにする。

I. 召使の名称

§1. 私役奴隷と召使

公役奴隷とおなじように、私役奴隷に対してもちいられる奴隷の名称は、彼らが従事している仕事の内容によってほぼ決定される。しかし一人の奴隷がいくつか種類の異なる仕事をかねることがあって、同一人物でもいくつかの名称でよばれたり、また奴隷が市民とおなじ仕事をするばあいもあるので、名称によってそれが奴隷であるのか市民であるのかを判断することは、かならずしも容易ではない。

たとえば、それが奴隷であることを確定することば *δούλος* (*dūlos*) ならば、奴隷と市民との区別はあきらかであるが、*dūlos* は〈奴隷〉の総称であり、それによって彼らの仕事の内容を知ることはできない。召使をあらわすときには、下男、下僕、奉公人という名称をふくめて、*dūlos* のほかに *ἀνδράποδον* (*andrapodon*), *οἰκέτης* (*oiketēs*), *παῖς* (*pais*), *θεράπων* (*therapōn*) ということばがあり、女性の召使なら *διάκονος* (*diākonos*) ということばもつかわれる。また *dūlos* が〈従者〉あるいは〈家来〉という意味ならば、*pais*, *therapōn* のほかに、*ἀκόλουθος* (*akolūthos*), *ὑπηρέτης* (*hypēretēs*), *διάκονος* (*diākonos*) も使用される。しかも *dūlos* と *andrapodon* をのぞいたほかのことばは、一般市民のあいだで卑語としてつかわれるけれども、それが奴隷を意味しているとはかぎらないのである。

アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』で、ヘルメウスがゼウスの使者として、プロメテウスのところへ赴いたとき、プロメテウスから、「おやおや、あそこにゼウスの使いの者が見えるぞ、なりたてのわがまま君主につかえる、例の使役 (*diākonon*) だ²⁾」とののしられている。この *diākonon* (対格) とよばれる使者は、奴隷ではなく、れっきとしたオリュムポスの神である。

1) 英語では公役奴隷を *public slaves*, *state slaves* とよぶのに対して、私役奴隷は *domestic slaves*, *private slaves* とよびならわしている。日本語による呼称については、拙稿『公役奴隷』(関東学院大学文学部人文学会「紀要」第6号 p.23)を参照。

2) Aischylos, *Prom.* 952.

ことばによるあいまいさをさけようとすれば
アイスキネースのように, “*ἄνθρωπος δημόσιος
οἰκέτης τῆς πόλεως*³⁾” 「国家の公役の下僕である
人間」というぐあいに, *ἄνθρωπος* 〈人〉が *οἰκέτης*
〈下僕〉であり, しかも *δημόσιος* 〈公役の〉とい
う形容詞で限定し, さらに *τῆς πολέως* 〈国家の〉
ということばによって, 主体の性格を明確にし
てゆくという方法が必要になってくるだろう。
そうすれば〈公役奴隷〉という, まぎれもない
一人物が目のまえにうかびあがってくることは
たしかである。これほどではないが, アリスト
パネースの作品でも, “*ἐν ἀκόλουθον διάκονον*⁴⁾”
「使役の家来をかかえておくために」というよ
うに, *ἀκόλουθον* 〈家来〉と *διάκονον* 〈使役〉と
をかさねて, その意味を明確にしている例があ
る。

たしかにこうでもしないと, 一語だけでは正
確に人物を判断しかねるばあいがあって, 古人
の註釈においてすらも, 人物の決定に混同が見
られるほどである。『蛙』のなかで, ディオニ
シウソスがエウリッピデースの家を訪問したと
き, それに応じて出てきた人物は, アイアコス
であるという解釈と, 名もない奴隷であるとい
う意見と両説がある⁵⁾。アイアコスをあげてい
るのは, アリストパネースの *scholia* としては伝
統的にもっとも信頼されている Ravenna 本で,
これに対し, Venetus 本では奴隷 (*therapōn*) を
あげている。言うまでもなく, アイアコスは冥
府において裁判係をつとめる英雄の名である。
このような例は, あとでふれる『アカルナイの
人びと』のなかでも見られる。しかし, 上例の
解釈のくいちがいは, 〈奴隷〉という名称から直
接に生じる混乱とは別の問題かもしれない。そ
れはことばの解釈と同時に, 主としてアリスト
パネースの喜劇を構成する, もっと重要な作劇
法と関連することがらでもあろう。

ところで, *dūlos* と *andrapodon* の二語に関

しては, まえにもふれたように, 〈奴隷〉一般
をあらわすことばとして, もっとも普通につか
われていた⁶⁾。終日, 自由をうばわれたまま主
人につかえている彼らが, 家庭の日用品の一部
と見なされていたことは, アリストテレースが
「奴隷 (*dūlos*) は一種の生きた品物である。下
僕 (*hypēretēs*) はすべていろいろな道具のまえ
に存在する道具なのである⁷⁾」と言っているこ
とからもうかがえる。

andrapoda (人間の脚をもったもの)⁸⁾ という
ことばが, アリストテレースの別の例に見られ
るように, 「ヘパイストスの三脚台 (*tripodas*)⁹⁾」
ということばから連想されるものであるなら,
それはまさしく道具の一種というほかはないだ
ろう。つまり, 家具財産の一部としての道具は,
また同時にそれを使用する主人の行為に属する
道具でもある。アリストテレースは一般的な所
有財産の一部としての道具を *dūlos* (奴隷) と言
い, 使用者の行為に関する道具として *hypēretēs*
(下僕) をあて, 結局, 奴隷とは使用者に対するい
ろいろな道具となるような下僕である (*διὸ καὶ
ὁ δοῦλος ὑπηρέτης τῶν πρὸς τὴν πράξιν*¹⁰⁾) と
考えている。そうであるならば, 道具としての
dūlos あるいは *andrapoda* であらわされるもの
が, 他のいくつかのことばであらわされる下僕
(一般的には召使) となるには, その中間に使用
者がかんらず介在しなければならない。使用者
(主人) のつかいかたによって, 〈奴隷〉たちは
さまざまな用途をもつ〈召使〉になるわけであ

6) 〈奴隷〉ということばの意味するものが, 古代ギリシアと近代とでは, ある面で非常にくいちがっているということは言えるが, *dūlos* を奴隷 (*slave*) と訳すべきではないとする Lauffer の意見は行きすぎであろう。(Finley, *Ancient Slave and Modern Ideology*, Chatto & Windus, London, 1980, p. 69 で Lauffer の意見が紹介されている。)

7) Arist. *Pol.* 1253b, 34.

8) *Ibid.*, 1253b, 36.

9) V. Ehrenberg は *tetrapada* (四脚台) と対比している。*The People of Aristophanes*, Schocken Books, New York 1962, p. 165.

10) Arist., *op. cit.*, 1254b, 8.

3) Aischinēs, *KATA TIMAPXOY*, 54.

4) Ar., *Ach.* 73.

5) Ar., *Ba.* 464.

る。しかし、そこには生産者としての奴隷の役割は厳密に排除されている¹¹⁾。

実際には、奴隷たちは生活の自由をうばわれながら、主人に道具としてつかわれていたばかりでなく、みづからも道具をつかい、生産者として船や車、靴、煉瓦等をつくり、パンを焼き、革をなめし、裁縫し、畑を耕したりする。こうして、彼らは主人や家族への強制された奉仕者となり、主人とおなじく、あるいは主人以上に使用者としての行為を発揮していた面もあったことを見のがしてはならない¹²⁾。このようなことから、奴隷に関する名称は一見単純であるようにおもわれても、使用者と奴隷および仕事との関係のなかでとらえられると、かなり複雑な性格をおびていることがわかってくる。アリストパネエスの作品にあらわれる奴隷たちのさまざまな言動は、たとえ作爲的に誇張されあるいは虚構をまじえているとしても、それが奴隷という枠内で表現されているかぎり、当時の社会的類型から逸脱したものではありえないだろう。したがって彼らに冠せられていた名称は、それぞれの仕事にむすびついた奴隷の性格をあらわしていると考えてさしつかえあるまい。

§2. 召使と家族

奴隷たちが仕事をする場所としては、家屋の内部と外部とがあり、また仕事の内容から言えば、彼らは生活の道具（アリストテレエス流に言えば行為に関する道具）であるのか、あるいは

は生産の道具として考えるかによって、彼らの性格をある程度分析することができるだろう。

家庭内で召使といえ、ひろい意味で、奴隷ということばと大体おなじである。ただし、家庭で働く召使を屋内と屋外とにわけて彼らの仕事を限定すると、屋外で労働する者、たとえば旅の従者、荷物運搬人、護衛、農夫、鋤夫などは召使ということばの範囲からはずれてしまう。いまここに、奴隷の名称とその役割との微妙な関係をあらわす、興味ぶかい例を見ることができる¹³⁾。

カリオン

なんとつらいこった、ゼウスさまに神がみさま、気のふれた主人の奴隷 (dūlon) になるとはね。だってどんなにいい忠告を奉公人 (therapōn) が申しあげたところで、当の持ちぬしにそれをする気がないとなれば、きまって奉公人がとんだ目にあうことになるんだから。なんと言ってもこのからだをうごかしているのは本人じゃなく、それを買いとった者だというのが運の定めだからね。

.....

あっしはもうだまったままじゃいませんよ、旦那。いったいあっしたちはどういふ奴のあとに従いてまわっているのか言ってくださいな、でなけりゃ、めんどうなことになりますぜ。

.....

クレミュロス

いや、おまえには隠しやしないよ。わしの召使 (oiketōn) のなかでは、おまえが一番信用できるし、それに盗みの名人ときているからな。

これは『福の神』の序幕の一部である。この話のなかで、dūlos, therapōn, oiketēs という三つの奴隷をあらわすことばがつかわれている。カリオンは奴隷で、クレミュロスは彼の主人

11) アリストテレエスは行為と生産とを区別し、奴隷は行為に関する所有物であって、生産と無関係な道具とみなす (*op. cit.*, 1253b~1254a)。それは奴隷を人間としてではなく、動物として考えたときのみなりたつ。しかし、現実には、奴隷は動物ではなく、人間であると彼もみとめているのであるから、この論は非現実的であると言わねばならない。

12) プラトンは『法律』のなかで、奴隷の方が兄弟や息子よりも徳にすぐれ、主人や家族、財産を救った例が数多くあることをのべている (*Nom.*, VI, 776D.)。奴隷が生産者である例はかならずしも多いとは言えないが、ことに *Ar.*, *Pl.*, 512~515.

13) *Ar.*, *Pl.*, 1~27.

である。二人はアスクレピオスの神殿に参詣して、いまアテナイに帰ってきたところだが、まだ旅装をといているわけではない。カリオンの意識のなかには、ながい道中、主人のおともをしてきた奉仕者としての自分の姿が想いえがかれていたにちがいない。

冒頭の出だしでは、奴隷 (*dūlon*) ということばをつかっても、まだそれが自分であるというよりは、一般的な奴隷の立場を考慮して話している。しかし、話が具体的になり、それまでおさえていた感情が一気に高ぶってくると、おともとしての自己が前面におし出され、奉公人 (*therapōn*) という立場がことばにからみつく。*dūlos* から *therapōn* へと名称が移行したのは、カリオンの心的変化をしめすものであると同時に、奴隷が従事する仕事の内容の変化をもあらわしている。

ここでつかわれた *therapōn* というのは、主人の付き人として奉仕する者である。たえず一人の主人のそばにつきそってはたらくのが *therapōn* の役目であり、屋内でも屋外でも助力者としての性格がつよい。子供や乳児の世話、あるいは家庭の主婦につかえる者であるならば、屋内の仕事が多いが、そのばあいには、〈子守り〉〈乳母〉というように、それに応じる名称がある。それについてはのちほどのべられるであろう。

さて、上の例で、クレミュロスが「わしの召使のなかで、おまえが一番信用できる」と言うとき、あきらかにこの主人は、自分の家のなかで仕事をしている奴隷たちを念頭においている。彼らが *oiketai* (複数主格) ということばでよばれるのは、それなりの理由があるはずである。

〈召使〉ということばは主として家事に従事する者を想起させるが、その仕事の範囲は屋外よりも屋内労働一般に通じるようにおもわれる。*oiketēs* は元来〈家〉に住んでいる者をあらわし、かならずしも召使や奴隷の意味をふくんではいなかった。ヘロドトスの例に見られるように、それは家族、ことに妻や子供たちをあらわ

すことばとしてつかわれている¹⁴⁾。アリストパネスでも、「お、主神 (*despota*) ディオニューソスさま、わたしが家族 (*oiketōn*) とともにこれから送りこんで犠牲をささげますこのおごそかな行列を、御嘉納くださいますように¹⁵⁾」と一市民のディカイオポリスが祈願をこめてのべている一節から知られることは、たとえその行列のなかに奴隷がまじっていたとしても、その祭が彼の家族を主体にしておこなわれるものであることはあきらかである。彼はそれにつづくせりふのなかで、自分の娘に対しては聖籠をはこぶ役目を言いつけ、妻にはこの祭を見物するようにと命じている。さらに、二人の奴隷にもそれぞれ祭の役目をあたえている。つまり、この *oiketōn* ということばであらわされる人びとは、主人 (ここではディオニューソス) の召使としてつかえる者であり、同時にそれは自由市民の家族でもあるという二重の性格をもっている。

『蜂』では、裁判好きの父親に対して、つぎのように息子が忠告している場面がある。「それじゃ、とにかくあなたはそんなことをするのが楽しいのなら、あそこへはもう出かけないで、この家のなかにおいて家族の者たちに (*oiketais*) 裁判をしたらどうです。¹⁶⁾」ここでも *oiketais* (複数与格) は、奴隷ではなく市民としての家族をあらわしている。しかも彼の家のなかでひらかれる裁判では、奴隷たちも告訴人になるよう息子からすすめられるのである。いよいよ裁判がひらかれるとき、息子は「お、御主人である (*despot'*) 王さま」とよびかけて、開廷のしきたりになっている祈禱をささげる。あたかも自分たちがその「御主人」の召使であるかのよう¹⁷⁾。

14) Hdt., 4, 106, 142. その他これに類する例は, Xenophon, *Cyr.*, 4・2・2, 悲劇では Aischylos, *Ag.* 733, Sophokles, *Tr.*, 908, etc.

15) Ar. *Ach.*, 274~49.

16) Ar. *Sph.*, 746~66.

17) *oiketēs* ということばが、つねに主従関係をあらわすことば (たとえば *despotēs* 〈主人〉) ととも

§3. 召使の二面性

oiketēs ということばは、家に住んでいる者、つまり〈家族〉をあらわす一方、その家族がつかえるもう一つの対象をもあらわしているのは興味ぶかい。語形の面から見れば、家族のばあいは複数形で、つかえる者たちは単数複数いずれの形でもつかわれるのが普通である。

一つのことばが両義性あるいは多義性をもつことは、現実問題としてそのことばがつかわれる対象のうごかしがたい相違と類似性にもとづくものであると同時に、そのことばの使用者の心理や価値観によって生じるものと考えられる。

アリストパネェスとほぼ同時代のプラトンは、奴隷に対する処遇のしかたについて、なるべく思いやりをかけ、体罰をくわえないようにとのべながら、他方では法にそむく奴隷には厳罰をもってのぞむべきであることを説いている¹⁸⁾。これは一見矛盾している発言であるが、当時のアテナイ人の奴隷評価に対する不安定な心理状態をあらわしている意見とも言えるだろう。事実、プラトンはこの不安定な気持をアテナイから来た客人の口を通じて語っている。「人間という家畜はなかなかやっかいなもので、必然的な区別、つまり奴隷と自由人である主人とを事実上区別することに対して、あきらかに自分がりっぱに役立ちたいとも、またそうなりたいともおもっていないのです。¹⁹⁾」

自由人である主人と奴隷との区別をするのは当然とおもわれる時代であっても、なおかつ一般の人びとのあいだでは、両者の関係を支配者と被支配者、あるいは所有者と所有物というように割りきって考えることは、いささか難点が

あったと言わざるをえない。このように人間を生きた所有物としてとりあつかうのに、多少でもためらいが生じるときに、〈召使〉は主人の目から見ると、〈家族〉のなかにまぎれこんでしまう結果になる。

しかし、召使たちが自由人の家族でないことは、現実には彼らが家庭の仕事にたずさわれば一目瞭然である。彼らはつねに主人に命令され、命じられた仕事をするほかはない。召使たちは自由人の家族のもとで行動し、労働するとき、主人の hypēretēs（下僕・手下）となり、あるいは therapōn（奉公人）となり、あるいは diakonos（給仕・使役）となって、みずからも道具をつかって主人の助力をするのである。

oiketēs が〈家族〉から峻別されて〈召使〉であるのは、彼らが主人や家族から独立してではなく、つねに主人や家族に隷属して行動し、生産せざるをえない性格をもっているからにほかならない。それゆえ主人と召使とのあいだにはたえず心理的な緊張がみなぎっていて、主人は召使の行動を監視し、これを家にひきとどめようとし、召使は当然、主人の束縛からのがれようとする。oiketēs はこのように相反する二つの性格をもつことばなのである。

oiketēs が召使と家族との不安定なむすびつきをあらわしているとすれば、そのもっとも典型的な現象は、召使の逃亡という形であられる。

逃亡は奴隷のしばしばこころみる方法であるが、主人にとってそれはもっとも警戒すべき奴隷の反抗であった。召使に対してきびしい処遇をするか、あるいは思いやりのあるとりあつかいをするか、という不安定な心理状態へ主人を追いつめるのも、召使の逃亡が大きな原因をなしていた。

アリストパネェスの『騎士』のなかで、一人の召使が日ごろの虐待にたえかね、「なにか主人の目をごまかす遁づら節でも考えてくれ」と同輩の召使に言うと、その相棒は即座に「にげ」ということばのあとに「だそう」とつづけて言

に使用されるわけではない。アリストパネェスでは〈家族〉をあらわすもう一つの例(Ba., 982)において、主人とおぼしき人物が家族の者をどなりちらすようすが描かれているが、これも主人の目から見れば、家族が召使のような存在と見なされたと考えられよう。

18) 『法律』776B~778A および 914A~915D.

19) op. cit., 777B.

わせる²⁰⁾。つまり「脱走」という暗示をあたえるのである。この二人の召使の意図は、喜劇特有の手法によって、直接観客にもうたえられ、一般市民の観客はそのうたえを拒否していないようすが、召使たちの話すことばから推察できる。ということは、奴隷の逃亡について、市民の関心がかなり高かったことをしめしていると言えるだろう。

『雲』では、召使に対する主人の歎きの独白がきかれる。「もうとくに鶏がないたのをわしはきいたぞ。それなのに召使たち(oiketai)ときたらまだ高いびきだ。以前はこんなじゃなかったのに。畜生、戦争のやつめ、なにもかもそいつのせいだ、わしが自分の召使たちをこらしめることさえできないなんて。²¹⁾」

これは召使をたたきおこすこともできない主人のいらだちをあらわしているのだが、なぜ主人は召使たちをこらしめることができないのか。この主人が言っているように、原因は戦争(ペロポネソス戦争)にある²²⁾。戦争においては、とくに敵方の攻撃に乗じて、多数の奴隷がしばしば敵方に逃亡したことは、奴隷所有者にとって見すごすことのできない事実であった。

トゥキュディデスは、スパルタ人のアッティカ侵攻により、2万人以上の奴隷、ことに家内労働の奴隷が逃亡したことをつたえている²³⁾。また奴隷たちは戦争で功績をあげれば、その後、

主人の手をはなれ自由の身になりうる道もひらけていた²⁴⁾。いずれにしろ、主人が召使を厳重に監視するか、手加減をくわえるかという気づかい、奴隷所有の是非とともに、つねに不安定な状態にあったにちがいない。

逃亡が召使のとりうる最大の反抗であるなら、家族の者(主人)がしめす召使への圧力は、体罰、ことに殴打である。

一般的に *dulos* という名称は、あらゆる仕事に従事する奴隷に対してもちいられるが、召使に関して言えば²⁵⁾、アリストパネエスのばあい、*oiketēs* とならんで *παῖς* (*pais*) という語が、集約的に数多くつかわれているのに気づく²⁶⁾。

pais (および *paidion*) は〈子供〉という意味で、息子や娘、あるいは少年、少女をそのなかにふくむが、そのほかにとくに奴隷をよびつけたり、仕事を命じたりするときに、しばしばつかわれる。小さい子供という印象が幼稚さをあらわし、さらに卑小化されて、奴隷とむすびついたと考えられる²⁷⁾。

『アカルナイの人びと』で、ラマコスとディカイオポリスがそれぞれたがいに張りあって、自分の召使にむかって用事を言いつけている場面では、*pai* (呼格, *pai, pai* とかさねることもある) が多発される。

20) Ar., *Hip.*, 20ff.

21) Ar., *Neph.*, 4~6.

22) 戦争に際しての奴隷の逃亡をとりあつかっている資料は多い。Joseph Vogt: *Sklaverei und Humanität. Studien zur antiken Sklaverei und ihrer Erforschung* (Eng. translation by T. Wiedemann, Oxford, Blackwell, 1974, p. 9f.), W. J. H. Starkie: *Aristophanes, The Clouds*, Amsterdam, (A. M. Hakkert), 1966, p. 12n. 平時の逃亡については M. I. Finley: *op. cit.* p. 111ff. が、するどく問題をえぐり出している。

23) Thukydides, VII, 27. 逃亡奴隷はアテナイだけに生じたわけではない。キオス島の奴隷たちは、アテナイの勢力が増大するや、スパルタ同盟国から離脱して、大挙アテナイ側へ逃亡した (id. VIII, 40)。

24) Ar., *Bat.*, 33, 693f. アルギスッサイの海戦で功績のあった奴隷が主人となったことをのべている。拙稿『公役奴隷』§4, iv.

25) 日本語の召使ということばは、意味があいまいで、かつ使用範囲がせまいが、便宜上ここでは、*oiketēs* という語に対応するものとしてもちいている。

26) このばあい、召使は家内労働が大部分である。

27) H. Frisk: *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Bd. II, Carl Winter, Heidelberg, 1973, では, *παῖς* *παῖς* 'Kindisch' と *παῖς* *παῖς* 'zum Sklaven gehörig' とをおなじ範疇でならべている。Liddell & Scott は、三つの範疇, Decent, Age, Condition に区別し、奴隷はそのうちの Condition の関係に属しているとする (*A Greek-English Lexicon*, Oxford)。また, A. Bailly: *Dictionnaire Grec-Français*, Hachette では、親子関係および年齢から見た *pais* と対置して奴隷を考えており、そのむすびつきは不明。

ラマコス

おい, おい (pai, pai), ここに兵糧箱をもち
出してくれ。

ディカイオポリス

おい, おい (pai, pai), ここに弁当箱をもち
出してくれ。

ラマコス

タイム入りの塩をもってこい, おい (pai),
にんにくもだ。

ディカイオポリス

わしには魚の切り身だぞ, にんにくはまっぴ
らだ。

ラマコス

塩魚を一包みもってきてくれ, おい (pai),
古いやつだぞ²⁸⁾。

ここに見られる pai ということばは, すべて召使にむかって発せられているが, もちろん, よびかけのことばでない例もある。上の話のつづきで, 「わしとこいつ (pais) とは先ほどから口論しているのだ²⁹⁾」とディカイオポリスがラマコスに弁明しているところがあるが, この pais は召使である³⁰⁾。pais の小辞 paidion も多くつかわれるが, アリストパネェスでは, その大部分が文字どおり「小児」の意味であり, 奴隷としてつかわれているのは数例にすぎない³¹⁾。

pais が奴隷と関連づけられる一つのヒントとして, アリストパネェスは「どうしたのだ, ちびさん, たとえ老人でも, なぐられる奴ならちびとよんだっていいんだからな」と, コロスに言わせている³²⁾。

28) Ar., Ach., 1097~1101.

29) op. cit., 1114.

30) ほかに Hip., 1385, Bat., 616, 624.

31) Neph., 132, Bat., 37. また Sph., 408. の παιδία は B. B. Rogers や MacDowell は「子供たち」と解釈しているが, Starkie が半ば疑問を呈しているように, これは子供というよりは奴隷たちと考えるべきだろう。「大声で知らせろ」と, 伝令の役目を命じられるのは, 奴隷にふさわしいのだから。

32) Sph., 1297.

日常生活で, 奴隷が主人に殴打されるのは当然のこととされていた。ことに法廷において, 主人が有利な証言をえるために, 自分の召使を拷問にかけけるのは, 公認されていた常套手段である³³⁾。子供たちも学校ではきびしい教育を受け, もしも怠惰であるばあいには, 容赦なく「殴打され, 笞うたれた³⁴⁾」と言われる。殴打される点では, その理由がなんであれ, 自由人の子供も召使も相違はなかった。しかもアリストパネェスのせりふでは, 駄じゃれではあっても, παῖς (子供) と παῖεν (殴打する) とが連想されるように, たくみにむすびつけられているのである³⁵⁾。

§4. 奉 仕

字句のうえから召使と家族との関係のをのべたときに (§2.), カリオオンという人物が登場して, 主人のクレミュロスに願いごとをうったえている場面を紹介した。そのとき, カリオオンは dūlos ということばを, therapōn ということばにかえて, 自分の立場を暗示しようとした。このことについて, もう一度ここで考えてみたい。

なぜ dūlos から therapōn へ移行したのか。たびたびのべるように, dūlos は一般的に奴隷を意味する。それ以外に意味するものがなく, 比喩的にもちいても「財産か運命の奴隷³⁶⁾」というぐあいに, やはり, 隷属的な意味しかもちえない。しかし, therapōn のばあいは, 元来, 強制されて支配される意味はなく, むしろみづからすすんで, なにものかに奉仕しようとする

33) Bat., 632, 616, 624. その他拙稿『公役奴隷』§4, i.

34) Neph., 972f. なお M. I. Finley, op. cit. 参照, とくに ch. 3. また同氏が The Ancient Economy, Chatto & Windus, London (1979), p. 82 で, 奴隷の心理について考えるには, “boy” というよび名にふれるべきことを説いているのは注目すべきである。

35) Sph., 456, 458 では「なぐる」行為と「召使」の意識が一致している。

36) Euripides, Hec., 865.

意図をふくんでいる。軽蔑の意をこめた pais とは対照的なことばである。アリストパネエスよりもふるい時代、たとえば前8世紀ごろでは、奴隷であるよりも、むしろ人間的になにかすぐれた人格や技術をもっている者が、主君の助力者として奉仕するのが therapōn であった。

τεύχεα δέ σφ' ἀπένεικαν ὑπέρθυμοι θεράποντες³⁷⁾

(船具類は氣力すぐれた付き人たちがはこび去った)

καὶ δοιὼ θεράποντε, δαήμονε δαιτρυσυνάων³⁸⁾

(そして肉切りの技術に年季をつんだ二人の付き人)

τὼ κρατερὼ θεράποντε Διὸς μέγαλοι γενέσθην³⁹⁾

(大いなるゼウスの力強い付き人になった)

この例にも見られるように、therapōn には卑小な暗い影がないどころか、誇り高い存在すら感じられる。ことに主神ゼウスにつかえる付き人となることは、このうえない名誉と言えるであろう。therapōn の本来の姿は、このように神の奉仕者としてつかえることであったと考えられる。

「武神アレエスにつかえる者 (therapontes), ダレイオスの英雄たちよ⁴⁰⁾」という例もそうであり、アリストパネエスの劇のなかでも『イリアス』からの引用として、「ムッサ(詩の女神)の敏速な奉仕者 (therapōn)⁴¹⁾」と鳥の詩人がうたっている。

神に奉仕するのは人間だけではない。神話の世界では、ゼウスを最高頂点とする他の神がみ�、ゼウスに奉仕することはよく知られている。『鳥』において、ゼウスは最高神であるが、自

分の頭上に驚をのせているし、その娘のアテナ女神もそれにならって梟をいただき、息子のアポロンも「付き人 (therapōn) よろしく隼をのせている⁴²⁾」とのべられているが、アポロンも神界においてはゼウスの奉仕者なのである。

たとえ奴隷の身分であっても、神に身をささげ奉仕すれば、だれもその者を卑しめることはできないという考えは、ただギリシアだけにあったわけではない。ヘロドトスの紹介によると、アレクサンドロス(パリス)が、ヘレネエをうばって故国トロイアにむかう途中、暴風に出あい、エジプトへ漂着したが、そこにヘラクレスの神殿があって、その社殿へにげこんで神に奉仕する者は、身の安全を保証されるということを知ったアレクサンドロスの従者たちが、みんなこの社殿へにげこみ、主人に反抗したという話がつたわっている⁴³⁾。

奉仕するという姿勢は、人間が神につかえるだけでなく、しだいに神からはなれて、人間対人間の関係のなかでも見られるようになる。その一つの典型は英雄たちの世界である。パトロクロスと言え、アキレウスの身がわりとなつて、トロイアの戦場で命果てた英雄であるが、彼はアキレウスと無二の親友であった。ホメロスは、このパトロクロスのことを「足の速いアイアコスの息子(アキレウス)の勇敢な付き人 (theraponta)⁴⁴⁾」とうたっているのである。また、アキレウス自身の口からも「私たちの付き人 (ἡμέτερος θεράπων)⁴⁵⁾」とよばれ、この一語によってパトロクロスが、アキレウスだけでなく、彼の一族といかに親密な関係にあったかをも知ることができる。

37) Homeros, *Od.*, 16.326. A. T. Murray は “proud squires” と訳し、高津春繁訳ではおなじく「誇り高い従者たち」、呉茂一訳では「意気の旺んな扈從の者ら」となっている。

38) *idid.*, 16.253.

39) *ibid.*, 11.255.

40) Hom., *Il.*, 2.110. cf. *ibid.*, 19.47.

41) Ar., *Or.*, 909.

42) *ibid.*, 516.

43) Hdt., 2.113. 神につかえる者が神聖視されたことは、ホメロスには数多く見られる。アポロンの神官クリュセイスの娘が、アガ멤ノンに辱められたため、アポロンは、ギリシア軍に疫病をはなつて罰したのもその一つ。(II. 1.)

44) Hom., *Il.*, 16.165; 18.152.

45) *ibid.*, 16.244.

therapōn ということばは、もちろん主従関係においてつかわれるのが本筋である。敬愛する者と敬愛される者との関係は、英雄時代あるいは貴族制時代においては、従臣と主君とによって代表され、ホメロスのえがく叙事詩の世界では、それがすっかり定着している。先にあげた例もその一部であるが、主君対従臣の関係になると、神対人間に見られるふかい敬虔さはいずれ、支配力の方がしだいに浮き出てくる。

パトロクロスが戦場で討死し、その葬儀準備をする場面で、アガ멤ノン王は部下たちに薪をあつめにやった。そのとき、部下たちの指揮者に「敬愛にみちたイイドメネウスの付き人(therapōn)、メリオネース⁴⁶⁾」を任命している。イイドメネウスはクレタ島出身の領主で、槍の名手として名がきこえていたが、メリオネースも彼と親類関係にあって、武勇にすぐれた英雄であった⁴⁷⁾。両者とも肩をならべるほどの勇敢な将軍であるが、メリオネースはイイドメネウスの奉仕役になって、主従の関係でむすばれている。ところが彼は一方で従であっても、同時に他の部下たちの主でもあり、完全な隷属的地位にあるわけではないことに注目すべきであろう。

これは therapōn のもつ一つの性格である⁴⁸⁾。神への敬愛も主君への忠誠も自発的な行為であり、しかも隷属的ではない。この共通の基盤は保持されながら、敬愛の対象である神と、忠誠の対象である人間とのあいだには、それぞれの奉仕者の概念がかたちづくられてゆく。奉仕者の行為は神につかえ、神を礼拝することと、人間（主人や家族）の世話をすることによってあ

らわされ、神に対しては清浄な敬虔、敬慕の念として上昇し、人間、ことに主人に対しては、世話をやくことから御気嫌とり、追従へとおちこんでしまう。

アリストパネースと同時代のリュシアースは、アンドキデースという男がおかした神に対する不敬な行為を告発する弁論のなかで、「この男はわれわれが認めている神がみを、つまり心から敬慕して(therapeuontes)身を清めたわれわれが犠牲をささげ祈祷するその神を、ふみにじったのです⁴⁹⁾」とうたっている。それに対して、アリストパネースの『騎士』の例では、デモス（民衆の意）という主人につかえる二人の召使が、追従のうまい新参の召使に先をこされ、主人をうばわれてゆくのをなげいてこう言っている。「あいつは、おれたちを追いやって、ほかの者に主人の世話をさせよう(therapeuein)としないんだ⁵⁰⁾。」この二つの例は、神と人間という相違はあっても、その対象とする主人に奉仕する行為は共通している。しかし一方は敬虔によるものであり、他方は追従によるものである。

奴隷によって奉仕される主人は、けっして英雄でも神でもなく、ごく平凡な市井人であるので、奴隷たちから敬慕されることは最大の誇りと感じ、自分にすすんで近づいてくる召使に対しては好意をよせたがる。『騎士』に登場する主人はその典型である⁵¹⁾。しかし主人から見た召使たちは、彼らがどんなに敬愛をこめて奉仕しようと、奴隷であることにはかわりはない。したがって、主人の口から召使にむかって therapōn という名称でよびかけることはなく、

46) *ibid.*, 23・113, 124.

47) *ibid.*, 2・645 sq.

48) Hom., *Od.* (13・265) でイタケの領主オデュッセウスが自分の身のうえを語っているなか「私はトロイア人の土地で、彼の父親（イイドメネウス）に、こころよくつかえて(therapeuōn)その付き人になるようなことはしないで、他の部下たちを指揮していた」という話があり、両面の行為をとりうる立場にも、自発性と非隷属性とがあらわれている。

49) Lysias, *KAT' ANAOKIAOY AΣEBEIAS* 『不敬の者、アンドキデース弾劾』 51.

50) Ar., *Hip.*, 59. ほかに、「なんと言っても、おれがこの主人をやしない、お世話だっけます(therapeuō)」(*ibid.*, 799.)というパブラゴニア人のせりふや、「デモスの旦那、あっしは旦那の面倒をよく見ますよ(therapeuō kalōs)」(*ibid.*, 1261.)という豚肉屋の例も、これとおなじ行為に属する。

51) *ibid.*, 728 sq.

dūlos か oiketēs か pais かあるいは他の蔑称による。

therapōn は奉仕する者の立場をあらわすやや誇りをこめたことばであり、やむをえず奴隷の身におとされている召使たちが、自分たちのことを言いあらわす自称語でもある⁵²⁾。主人が召使の有用性を考慮し、奉仕者として自分につくしてくれることをつよく意識しているばあいには、蔑称が排されて therapōn という表現をとることもある。

『福の神』のなかで、およそ労働という労働は、すべてだれがするのかという話がもち出されたとき、主人クレミュロスは「いまあんたが言ったようなことは、すべてわしらのために奉公人たち (therapontes) が骨折ってくれる」と言い、それをきいた相手 (貧乏神) も「では、どうやって奉公人たち (therapontes) を手に入れるのだ?」とたずねている⁵³⁾。この二人の意識には「わしらのために」苦勞してつくしてくれる奴隷たち、という考慮があったとおもわれる⁵⁴⁾。

おなじ劇のなかで、カリオォンの家にヘルメス神がたずねてくる場面では、「いそいで走って行って、主人をよべ、それから奥さんと子供たち、それから奉公人たちを (therapontas)⁵⁵⁾」というぐあいに、奴隷たちを家族の者とならべてあげているが、ヘルメス神にしてみれば、これらの者はすべて自分に奉仕してくれる人間であり、いや人間でなくとも、たとえ犬や豚であっても、そのとき空腹をかかえていたヘルメスにとっては、ありがたい奉仕者なのである。あまりふかく心理学的に立ち入ることはできないにしても、少なくともヘルメスは召使たちに対して、しいたげられた奴隷の姿をそのとき想

いえがいてはいなかったにちがいない。

奴隷である召使たちが、自分たちのことをよぶときには、なるべく蔑称をさけて、いくらかでも自尊心を傷つけないですむ therapōn ということばをつかうのは、当然のこととおもわれる。福の神が舞いこんで、にわかに裕福な生活をおくるようになったクレミュロスの奉公人カリオォンは言っている。「あっしらの提灯はたちまち象牙作りになった。それにあっしら奉公人たち (therapontes) はスタテル金貨で、丁半あそびをしているありさまだ。⁵⁶⁾」もしもこの therapontes を dūloi とか oiketai とかということばで言えば、事実としての奴隷をあらわすにはちがいないが、彼ら自身の感情のこもった表現とはならないだろう。つまり、therapōn という名称にこめられた奉仕者の意味を知れば、奴隷というイメージをくつがえそうとする次元の異なった召使の姿が想いうかんでくるのである。

アスクレピオスの神殿の参詣に、付き人として主人のおともをしたカリオォンが、奴隷 (ドゥウロス) ということばを、奉公人 (テラポォン) ということばにすぐおきかえて、自分のことを語ったのも、それなりの理由があったわけである。

§5. 使 役

アリストパネエスの『福の神』における終幕は、召使について興味ぶかい例をしめしてくれる。福の神がとりついたおかげで人びとは裕福になり、神だのみや、神への捧げものをしなくなった。そのあおりをくって、ヘルメス神自身とゼウスの神官とが飢えて、一市民のクレミュロスの家へころがりこんでくる。戸口で門番のカリオォンとヘルメス神との一問一答がかわされる。

カリオォン

それじゃ、神さまがたをおきざりにして、あ

52) ほかに diakonos がつかわれる。v. §5.

53) *Pl.*, 518f.

54) Scholia には「奴隷たちは苦勞して仕事をする」とあるが、二人の話者は、この苦勞を奴隷たちがすべてひきうけてくれることを期待しているのである。

55) *Pl.*, 1103 sq.

56) *ibid.*, 815.

あなたはここにとどまろうってわけ？

ヘルメウス

おまえたちのところにいる方が、ずっとましだ。

カリオン

なんだって？ 逃亡するのがかっこよく見えるのかい？

ヘルメウス

いい暮らしをするためなら、どこだって祖国だよ。

カリオン

あっしたちのところにて、あんたはどんな役に立つんだろうね？

ここではヘルメウスが戯画化されて、逃亡奴隷のようにあつかわれ、奴隷であるカリオンの方が主人のような立場で話がすすめられている。いろいろな仕事が一覧されたあと、ヘルメウスの役割がきめられる。

ヘルメウス

じゃ、わたしは競技係になるよ。それで文句はなかろう？「福の神」には一番びったりしているからね、音楽や運動競技をおこなうってことは。

カリオン

よび名をたくさんもっているのは得だな⁵⁷⁾。この人はそれで食うあてがみつかったというわけだ。道理で審判員たちがよくなん枚もの登録票に記名したがるわけだ。

ヘルメウス

ではそういうことで、わたしはなかに入るよ。

カリオン

いいとも、井戸のところへ行って、自分で臍物を洗ってくれ、すぐにでも使役(δράκοντικός)らしく見えるようにな⁵⁸⁾。

ヘルメウスは自分が意図する競技係の審判員とはまったく別の役目をさせられる召使になる。ここで演じられているヘルメウスは、二つの点で重要である。一つは逃亡奴隷が自分で身売りをするさまをえがいていること、もう一つは召使としてはたらく仕事の分担に関してである。

奴隷の逃亡についてはすでにふれたが、逃亡した奴隷はかならずしも自分がのぞんでいたような仕事にありつけるわけではない。ヘルメウスは（神ではあるが、ここでは身売り奴隷として考えると）自分がもっている技術を十分に発揮できる仕事にありついたとは言えない。アリストテレウスが言うように、奴隷が一種の生きた道具であるならば、ヘルメウスは、道具としての価値はそれほど高く評価できないことになる。

また、一般に奴隷をつかう主人は、自分の必要とする用事をなしとげてくれる適当な奴隷を手に入れたいののは当然であるが、それはたいていのばあい困難であるので、奴隷を入手後、みづから仕事を教えこむということがしばしばおこなわれた⁵⁹⁾。しかも奴隷にあたえられる仕事は、つらい、危険性の多い、時間のかかる労働が多かった⁶⁰⁾。したがって、ヘルメウスはたとえ神の身とはいえ、いったん奴隷に転落したからには、主人の言いつける命令にしたがわねばならないのである。

彼が仕事にとりかかるとき、カリオンは「すぐにでも使役らしく見えるようにな」とよびかけている。ここでつかわれた「使役」は、

57) ヘルメウスが神界でうけもつ役割は、この「福の神」にも列挙されているように、辻守としての守護神や商業神をはじめ、道案内(道祖神)、伝令、それに取り引き(ペテン)の名手でもある。この詐欺的行為のために、ヘルメウスはオリュムポスの他の神がみよりも軽視されている。このカリオンとの対話も、ヘルメウスの取り引きの技術の一面をあらわしていると言えよう。

58) Ar., Pl. 1148~117.

59) Thomas Wiedemann, *Greek and Roman Slavery*, Croom Helm, London, (1981) p. 124. Xenophon, *The Householder*, 7 (41).

60) T. Wiedemann, *op. cit.*, p. 130. Paulus, from *Decrees*, book 1. (*Digest* 14, 5-8).

召使 (oiketēs) とは意味が異なり、特殊なばあいにはしかつかわれない。その用例も、アリストパネエスの作品では、名詞として *διάκονος* (diākonos) の形で (格変化した形もふくめて) 4 例が見られるだけである⁶¹⁾。

diākonos の性格については、つぎの『鳥』のなかの問答によって、かなり明瞭に理解しうるであろう。

エウエルピデエス

ところで、おまえはいったいなんという動物だね？

はましぎ

おれなんざあ 奴隷 (dūlos) の鳥さ。

エウエルピデエス

闘鶏かなにかで敗けたのか？

はましぎ

そうじゃなくて、主人がやつがしらになったとき、使役 (diākonon) の家来をかかえておくために⁶²⁾、おれも鳥になるようにと主人は祈ったのさ。

エウエルピデエス

へえ、鳥でも使役 (diākonū) かなんかが要るのかい？

はましぎ

うん、あのかたはね。最初、人間だったからだとおもうよ。それで、パレエロンの小はぜを食いたいと言え、大皿をとりあげて小はぜの方へ駈けて行くのはこのおれさ。スップがほしいとか、やれ柄杓だの土瓶だの要となりゃ、柄杓の方へおれがすっとなで行くんだ。

エウエルピデエス

これぞまさに駈けっこ鳥。ところで駈けっこ鳥君、ひとつ走りしておまえさんの主人をこ

こによんでくれないか⁶³⁾。

ここにも前節の奉公人 (therapōn) の例に見られたように、奴隷 (dūlos) という一般用語と、使役 (diākonos) という特殊用語が、注意ぶかくつかいわけられていることに気づく。

diākonos の一つの特徴は、主人の命令を即座に実行にうつし、二つの対象関係を取りむすぶために走りまわるところにある。「はましぎ」が主人の命令に即応し、土瓶よ、柄杓よ、と走りまわるのは diākonos とよばれるにふさわしい。

そのまえの例で、カリオンがヘルメエスに対して diākonos ということばをもちいたのも、おそらくヘルメエスを自分の使役としてつかう魂胆があったためであり、彼はさっそくその場で、ヘルメエスに臍物あらいの用事を言いつけているのである。

アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』では、ゼウスの使者として、プロメテウスのもとへさしむけられたヘルメエスを、プロメテウスが diākonos とよんだことはすでにのべた⁶⁴⁾。元来、ヘルメエスの性格には〈伝令〉の属性があり、diākonos という名称が適している。もちろん、アリストパネエスは、それを承知したうえで、彼の喜劇に召使としてヘルメエスを登場させたのであろう。

プラトンの『ポリティコス (政治家)』によると、役所で公文書をつくる下役人や、伝令使たちの集団や、さらに神の意志を取りつぐ神官や予言者までもふくめて、すべて召使という名称でよばれている⁶⁵⁾。この召使の性格は使役 (diākonos) であって、文書、伝言、予言のとり

63) Ar., Or., 69~81.

64) v. § 1.

65) Platon, Pol., 290A-D. Ar., Pl. の終幕で、伝令神ヘルメエスにつづいて、ゼウスの神官が登場し、これもヘルメエス同様に、クレミュロスの使役となる。〈召使〉のなかに伝令や神官をとり入れたアリストパネエスとプラトンの著作との共通性は注目に価いしよう。

61) 引用例にあげたように、*διάκονος* (主格) [1], *διακόνου* (属格) [2], *διάκονον* (対格) [1] で、ほかに形容詞として *διακονικός* [1], 動詞として *διακονέω* [2] がある。

62) 本稿 § 1.

つぎ役である。このことはアリストパネエスの『鳥』に登場する虹の女神イリスについても言える。この女神は虹によって橋渡しをする性質上、“diakonū”とよばれ、使役の意味が保持されている⁶⁶⁾。

召使たちが、なんらかの使命をおびてうごきまわるとき、彼らは召使、すなわち奴隸として自分を意識するよりも、伝令役としての自分の立場を考慮する。『女の議会』で、「おお、幸福な民衆、幸運なあたし」と言いつつ登場してくる女召使には、陰気な奴隸の暗さは見られない。彼女はブレピュロスという主人の召使であるが、自分のことを「あたしは走り使い (diakonos) なんです」と、近所の者に紹介している⁶⁷⁾。事実、彼女はブレピュロスの妻に命じられて、主人と娘たちを町からつれもどさなければならぬ役目があるのだ。

このように、伝令と命じられた仕事を同時に実行するとき、特別の事情がないかぎり、召使たちを diakonos (使役) とよび、彼らも自分たちをそのようによぶ。

§6. 随 伴

もうすでになんども例として出てきた『福の神』の召使カリオンという人物は、実はさまざまな性格をおびた奴隸である。もし彼に名称をあたえたとしたら、まず奴隸 (dūlos) であり、家事に従事している召使 (oiketēs) であり、彼自身に言わせれば、忠実な奉公人 (therapōn) であろう。彼は主人の使者として行動しているわけではないから、使役 (diakonos) とは言えないが、主人にしたがって旅をしたその行為は奴隸の仕事の一つであるから、それに対応する名称は、他のばあいと同様、あるにちがいない。しかし作品のなかでは、彼に対してそのような特別の名称は見あたらない⁶⁸⁾。カリオンとよく

似ている人物で、クサンティアアスというのがある⁶⁹⁾。彼も主人にしたがって旅に出るが、そのような仕事に従事する奴隸に対して、特別の名称はもちいられていない⁷⁰⁾。

カリオンもクサンティアアスも主人のお伴をして旅に出ていながら、なぜそういう仕事に対応する彼らの名称がないのか、あるいはなぜ少なくともアリストパネエスによってもちいらなかったのか。問題は彼らの行動のなかにひそんでいる。

主人と奴隸との関係は、なんらかの仕事を媒介にしてむすびついているが、その仕事の内容、種類は屋内と屋外とでは異なるし、労働や技術の相違によっても異なる。さらに性別、年齢別によっても異なってくるだろう。それらの諸点を考慮して、奴隸が労働する分野を大別すると、家事に関する仕事をする家事労働、家内工業を中心とする屋内生産労働、農地、海洋、鉱山を基盤にする屋外生産労働である⁷¹⁾。奴隸はそのいずれの分野においても、独立して仕事をすることは不可能で、かならず自由市民たちの監督のもとに仕事をしなければならない。

カリオンとクサンティアアスが属する仕事は、このうち、あきらかに家事労働である。それは屋内であれ、屋外であれ、家族もしくは主人への直接奉仕を意味する。したがって主人が旅に出たとしても、それに随伴して主人の助力をする奴隸は、パンをこねたり⁷²⁾、炊事をしたり⁷³⁾

68) 『福の神』でもちいられている〈奴隸〉をあらわす名称は、dūlos, oiketēs, pais, therapōn の4種。

69) Ar., Ba. 『蛙』に登場する召使。主人ディオニュソスとともに下界へ旅をする。

70) 『蛙』でもちいられている〈奴隸〉をあらわす名称は、dūlos, oiketēs, pais, paidion の4種で、典型的には『福の神』の奴隸よりもとりあつかいかたが一般的、抽象的である。

71) プラトンは自由市民のもつ技術を分類しているが、そのうち、商業にたずさわる者をも召使的奉仕者とし、生産技術と区別している。Pol., 289E~290A.

72) Ar., Hi., 65.

73) Ar., Ach., 1003, Pl., 1169, Hi., 419.

66) Ar., Or., 1253. イリスはつねに神界の使者として登場する。cf. Hesiodos Theogonia, 780. Hom. Il., 2, 3, 5, 8, etc. 多数。

67) Ar., Ek., 1116.

する奴隷と同様に、〈召使〉とよばれる者である。旅に出て、主人や家族の荷物をかついだり⁷⁴⁾、提灯をもったり⁷⁵⁾しても、それはその奴隷に割りあてられた定まった仕事ではなく、召使ならばしなければならない奉仕なのである⁷⁶⁾。旅に出ると荷物をかつぐのが、一般の召使たちの仕事であれば、そのような労働によって特殊化される召使の名称はない。それゆえ、カリオォンの主人は召使(oiketēs)ということばでカリオォンをよんだのである⁷⁷⁾。

しかし、召使ではあっても、カリオォンやクサンティアァスのように、たえず主人のそばについてまわる者は、やはり特殊な仕事に従事していると言えるだろう。子供のそばにつきそって、子供の助力者となる者が paidagōgos という名称をもつように、主人の直接の助力者となる者もなんらかの名称をもつはずである。実はすでに前節においてその例を見た⁷⁸⁾。ἀκόλουθον δίακονον (使役の家来) ということばがそれである。diakonos は使役であるが、akolūthos は「つきしたがう者」である。したがって上例は、「つきしたがう使役」でもあるし、「使役としてつきしたがう者」でもある。

前415年、アテナイがアルキビアデスを指揮官にして、シシリア島遠征に出航しようとした矢先、市内のヘルメス像(道祖神)がことごとく破壊されるという事件が生じた。その

とき、その事件の真相なるものを密告した者がいた。それは居留外国人と akolūthos、その他女性市民であった⁷⁹⁾。ここでつかわれている akolūthos は、たしかに一般の奴隷ではなく、たえず主人のそばをはなれず、主人とたえず行動をともにしていた召使でなければならない。そうであればこそ、密告の情報入手もできたはずだからである。歴史家トゥッキュディデスが、ここで akolūthos の語をもちいたのも、かなりの必然性を感じさせる。

akolūthos は主人の側近であり、従者であり、もっとくだけたことばで言えば、腰元である。主人のそばにいて主人の助力をするのは屋内ばかりとはかぎらない。トゥッキュディデスが別の箇所でのべているように、アテナイ軍がシシリア島遠征に失敗して、無惨な徹退をせざるをえなくなったとき、重装兵や騎兵は通常、自分たちで食糧を携帯することはないのに、それを運搬する akolūthos たちがいなくなったり、また彼らを信用できなくなったり、あるいは逃亡したりしたので、めいめい自分たちの手ではこばなければならなかったと言う⁸⁰⁾。ここで言われている側近たちは、戦場であって、主人の武具や携行品をになう助力者である。

プラトンは、思慮ぶかい人間はなにをすべきかという問題について、クレイニァスとアテナイから来た客人とが論議する対話のなかで、akolūthos という語をつかっている。「ともかく、神にはどういう行為が愛であり、また従順な者 (akolūthos) なのであるか?」⁸¹⁾つまり、神にしたがう者とはどんな行為をする者であるか、という問いかけであるが、この akolūthos にも〈随従〉の意味がこめられている。

しかし、クセノポォンが紹介しているクリトブ羅斯とソクラテスとの対話のなかで、「そのあとで、それに付随するものを (akolūthos) きみにお教えしよう⁸²⁾」というばあいは、

74) Ar., Ba., 8, 12, 596.

75) Ar., Pl., 815f.

76) 『蛙』の冒頭で荷物かつぎが奴隷の仕事であることをなげいている。

77) cf. 本稿 §2.

78) §5 および §1.

79) Thu., 6.28. cf. Andokidēs, ΠΕΡΙ ΤΩΝ ΜΥΣΤΗΡΙΩΝ『密儀事件について』11~14. Thūkydides はその密告した奴隷を akolūthos とよび、Andokidēs はそれを therapōn とよんでいる。いまこの二つの表現の相違を考えるならば、akolūthos の方は、主人との密接な関係を重要視した召使であり、therapōn の方は、アルキビアデスがひそかにおこなった模擬の密儀に出席したことを重視した〈召使〉である、と言えるだろう。

80) *ibid.*, 7. 75.

81) Pl., *op. cit.* 716c.

82) Xen., *Oiko.* 3.2.

因果関係として密接にむすびついたものであって、随伴の意味がつよい。その意味では、アリストパネエスの “Κἀκεῖνά μοι δὸς τὰκόλουθα τῶν ῥακῶν⁸³⁾”（ぼろにはつきもののあれもいただきたい）という、ディカイオポリスのせりふと同類である。

主人のそばにくっついてまわる召使が *akolūthos* とよばれるならば、カリオンはこの種のタイプからはずれることがわかる。その証拠に、彼は参詣から帰宅すると、主人のそばからはなれ、日常、彼がうけもっている使役⁸⁴⁾や炊事⁸⁵⁾や門番⁸⁶⁾の役目についているのである。もっとも、これは喜劇の舞台であるから、一人でいくつもの役目をこなさねばならないという特殊事情はあるが、彼が演じている召使の仕事のどれをとっても *akolūthos* とよぶにふさわしいものはほとんど見あたらない。これは『蛙』のクサンティアエスについても同様である。主人の信用をえて側近として労役に服することは、奴隷にとってはかなり困難であり、したがって一般の召使にくらべてその数がすくなかったと

も考えられる。

『女の議会』のなかで、いわゆる 共産主義的世界を目ざして奮闘するプラクサゴラは、貧富の差をなくし、万人が平等の生活をおくらねばならないことを主張するが、その一節に、「多数の奴隷 (*andrapodois*) をつかっている者がいるかとおもうと、一人の腰元 (*akolūthos*) もつかっていない者がいる、ということのないように」とのべている⁸⁷⁾。*andrapodon* は、あきらかに、人間を道具のように見たてて、それを数多く所有するという感覚に根ざしていることばであり、*akolūthos* は主人に忠実な助力者としての奴隷をあらわし、その両者を、アリストパネエスは一つのせりふのなかで、実に効果的につかいわけている。

この例から見ても、主人の片腕となるような信頼のおける召使は、おそらくアテナイ市民の家庭には数すくなく、またそれだけに貴重な存在であったにちがいない。

(つづく)

〔横浜国立大学経営学部教授〕

83) *Ar., Ach.*, 438.

84) *ibid.*, 230f.

85) *ibid.*, 321.

86) *ibid.*, 1097.

87) *Ar., Ek.*, 593.